

平成 28 年度 研究成果報告書

Research Achievement Report FY2016

講座名・職名 Course Title・Job Title	アジア I・准教授
氏名 Name	小西敏夫
専門分野 Academic Field	朝鮮語学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	<p>積譜詳細、月印千江之曲及びその原典における言語表現の違いについて</p>
<p>1449年に刊行された『月印積譜』の第17には、『法華経』の「如来寿量品」と「分別功德品」が部分的に朝鮮語に訳されている。『法華経』は、初期大乘仏教経典『サッドルマ・ブンドリーカ・スートラ』が漢訳されたものである。この『法華経』は、1463年に刊行された『法華経諺解』においても、朝鮮語に訳されており、「如来寿量品」と「分別功德品」は、『法華経諺解』の巻5に収録されている。</p> <p>今年度は、『法華経』の「如来寿量品」と「分別功德品」の朝鮮語が、上の2つの文献において、どのように異なった言語表現としてあらわれているかに注目した。文字に関して言えば、『法華経諺解』の方が『月印積譜』よりも14年後に刊行されており、『月印積譜』において使用されていた「唇軽音 p」の文字が『法華経諺解』の方では使用されなくなっている。語彙に関しては、『法華経諺解』巻5の方では、原文である『法華経』の漢字語がそのまま使われているのに対し、『月印積譜』第17の方では、それを固有の朝鮮語に訳しているものが多かった。たとえば、『法華経』や『法華経諺解』巻5の方では、「上」、「下」、「高廣」、「使者」などのように漢字語であらわれているものが、『月印積譜』第17の方では、「うえ」、「した」、「たかくひろく」、「ひと」などのように固有の朝鮮語であらわれているのである。現代朝鮮語の数詞は1から99まで、漢字語と固有語であらわすことができ、中期朝鮮語では1000まで漢字語と固有語であらわすことができるが、『法華経』や『法華経諺解』巻5で「三十二」と漢字語であらわれているものが、『月印積譜』第17の方ではそれに対応する固有朝鮮語であらわれている。また、『法華経』や『法華経諺解』巻5で「諸」という漢字の接頭辞であらわれているものが、『月印積譜』第17の方では複数を表す固有朝鮮語の接尾辞であらわれていたりもする。しかし、逆の場合もあり、『法華経』や『月印積譜』第17の方で「久」、「読誦」、「無量」、「最」と漢字語であらわれているものが、『法華経諺解』巻5の方では、「ひさしい」、「よみとなえる」、「かぎりなく」、「もつとも」のように固有朝鮮語であらわれている場合もある。また、多くの事物を列挙する場合、『法華経諺解』巻5では、共同格助詞「と」を用いて「布施と持戒と忍辱と精進と一心と智慧」のように表記するのに対し、『月印積譜』第17の方では、原文である『法華経』と同様、共同格助詞「と」を挿入せずに「布施持戒忍辱精進一心智慧」のように表記されている。それから、副詞の位置が『月印積譜』第17だけが『法華経』や『法華経諺解』巻5と異なっているものが数例見られた。</p> <p>これからも、『法華経諺解』と『月印積譜』に表れる言語表現について研究を続けていく予定である。</p>	